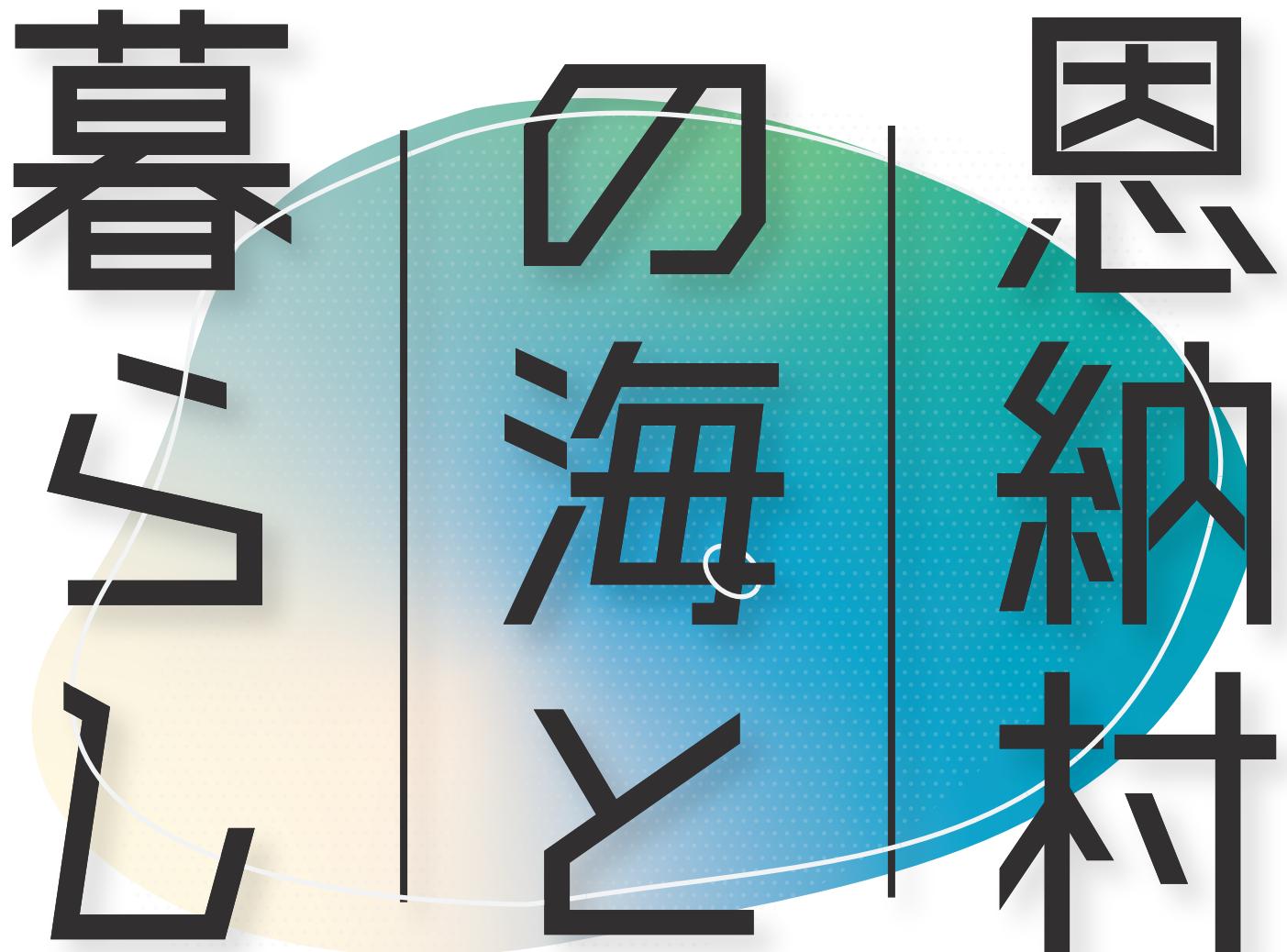


令和 5 年度



琉球大学資料展

「琉球大学資料展－恩納村の海と暮らし－」開催にあたって

あそう 伸一 (琉球大学人文社会学部教授)

琉球大学附属図書館・琉球大学博物館（風樹館）は、2014 年より毎年学外企画展を開催しています。琉球大学が所蔵する資料のなかから開催地にゆかりのある資料を展示してきた本企画展が、今年は恩納村博物館で開かれます。

今回の企画展では、「海と暮らし」をテーマに「恩納村の海から」「恩納村へ海から」「恩納村の暮らしと自然」というセクションをもうけ、恩納村の歴史や社会、文化、芸能に触れていきます。

恩納村博物館のすぐ側には村指定文化財の「唐人墓の墓碑」があります。これは、1824 年に仲泊に漂着した中国福建省の商船に乗っていた 5 名の名前が刻まれている文化財です。今回の展示では、この漂着事件に関わる『歴代宝案』の記事の紹介や、外国の船が琉球に漂着してきた際のマニュアルが展示されます。「唐人墓の墓碑」を通して、海からみた恩納村の歴史を立体的に理解することができるでしょう。

自然との関わりでは、博物館所蔵のサンゴ標本や恩納岳の生物標本の展示があります。動物語彙（方言マップ）や、恩納岳を歌った恩納なべの琉歌、詩人の相川俊孝が描いた「恩納岳の遠望」（『琉球游記』）もあわせて観覽することで、恩納村の多様な自然と人々の生活や文化の一端を垣間見ることができるはずです。

また、琉球大学考古学研究室の所蔵する熱田貝塚の発掘資料が展示されます。今回から考古資料も展示することになったため、本企画展を通して先史時代から現代までの長期にわたる恩納村の豊かな歴史と文化をより実感できることと思います。さらに本企画展の関連講演やポスターセッションも行われます。

この展示が、恩納村各地の風景や歴史・文化に触れ、また人々の生活に豊かさをもたらす海や自然について考えることのできる機会となれば幸いです。

凡例

- 本書は、2023 年 10 月 7 日（土）～10 月 29 日（日）まで恩納村博物館にて開催される令和 5 年度琉球大学附属図書館・琉球大学博物館（風樹館）企画展「琉球大学資料展～恩納村の海と暮らし～」の展示資料解説（パンフレット）である。
- 特に所蔵の明記がない資料については琉球大学の所蔵資料である。
- 展示資料には本書に掲載していないものがある。
- 本書の編集は、琉球大学附属図書館が担当した。

恩納村の海から

いきなりですが、みなさんに質問です。

この恩納村博物館に来てみて、何に驚きましたか？

おそらく、「海」と答えた方もいらっしゃるのではないかでしょうか。

博物館に来るまでの道のり、博物館の自動ドアが開き踏み入れたロビーなど、どこからでも海が見えます。

この海は、むかしから人々の暮らしを支えてきました。海に入れば魚や貝が捕れる、海沿いの石を切り取れば家や墓に使える、海に繰り出せば島や国に行ける……。むかしから今に至るまで、海を巡る人々のさまざまな物語がありました。

このような人々の活動の証拠を「遺跡」からも探し出すことができます。恩納村では現在までに様々な遺跡が発見されています。最近刊行された『恩納村史』をみると、行政区ごとに遺跡がまとめられています。それを参考にすると、戦争遺跡もあわせると約 120 以上の遺跡が掲載されています。遺跡の立地をみると、多くは海沿いにあります。ここからも人と海の深い関係にあったことを知ることができます。

本テーマでは、琉球大学考古学研究室所蔵「熱田貝塚」出土資料、恩納村博物館所蔵「山田グスク」出土資料を展示します。時代は異なる遺跡ですが、かつての恩納村に生きた人々の物語を、ぜひ、「海」という視点から感じとってみてください。
（主税英徳）

あつた 熱田貝塚



<熱田貝塚出土くびれ平底土器>



<熱田貝塚出土波状文施文土器>

恩納村字安富祖熱田原にあります。現在の恩納村立安富祖小学校周辺になります。標高 3 m 程度の海岸砂丘に立地し、これまでの発掘調査によって、平安時代並行期～グスク時代の時期の遺構が発見されています。

熱田貝塚では、これまでに計 3 回の発掘調査が実施されています。1958 年に安富祖小学校グラウンドでの採砂工事がきっかけで遺跡が発見されます。その後、① 1960 年に考古学実習を兼ねた琉球大学による発掘調査、② 1978 年に国道 58 号線拡張工事に伴った沖縄県教育委員会による発掘調査、③ 2010 年度に個人住宅建設に伴った恩納村教育委員会による試掘調査が実施されています。

今回展示している資料は、① 1960 年の琉球大学史学科による発掘調査で出土したものです。この調査は、第 2 次世界大戦後における沖縄考古学の開始期の調査として学史にも残るものです。また、貝塚時代後期の特徴をあらわす典型的な「くびれ平底」土器の完形資料が出土し、土器研究にも大きく寄与したものになりました。
（主税英徳）

山田グスク



<恩納村山田城址の遠望：那覇市歴史博物館提供>

恩納村字山田城原にあります。標高 90 m 程度の丘陵に立地しています。護佐丸の最初の居城として広く知られています。

山田グスクは、1953 年段階には、多和田真淳氏によって確認されていたことが推測できます。その後、1980 年以前では仲松弥秀氏、1980 年以降は、読谷村資料館、知念勇氏、亀井明徳氏らによって踏査による調査が実施されてきました。本格的な調査は、保存と活用を目的として、1985 年度から恩納村教育委員会によって進められてきました。

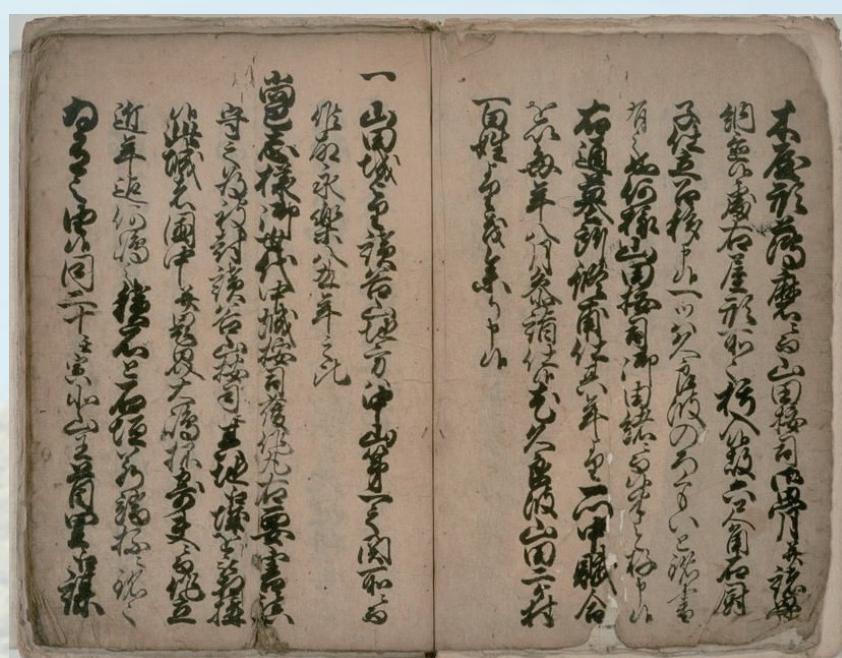
これまでの発掘調査によって出土した中

国産陶磁器の年代をもとにすると、14～15 世紀を主体とするグスクであると考えられています。遺物は、陶磁器のほかに土器や武具、食料残滓、玉類、瓦なども発見されています。遺構は、野面積や切石積みの石垣や掘立柱建物跡などが検出されています。

その眺望の良さや周辺に道路遺構などもあることから、山田グスクは、「北の盾」として、西海道の抑えと周辺の地を領する地方支配者の主城であったことが推測できます。
(主税英徳)

『異本毛氏由来記』(伊波普猷文庫)

『異本毛氏由来記』(成立年代不明)は、護佐丸の経歴を中心に記述された毛氏の先祖由来記です。先祖に関する詳細な記録を後世に伝えるため、高江洲筑登之親雲上や毛氏一門の大城里之子親雲上、山城里之子親雲上らが『中山世譜』や系図などを参考に書き記したとされています。



護佐丸は、三山時代末期から第一尚氏の時代に活躍した人物です。山田グスク按司の子として 1390 年ごろ生まれ、後に父の後を継いで山田グスクを拠点とする読谷山按司となっています。山田グスクを拠点としていた時期には久良波海岸(恩納村)を港として利用し、広く海外と交易したと想定されます。久良波海岸沿いの砂浜や海底からは、同時代のグスク土器や中国産陶磁器などが出土しているようです。

(前田勇樹)

恩納村へ海から

恩納村は東シナ海に面しています。琉球は、この海を通して中国（明・清）や薩摩と通航し、外交や交易のために人々は渡海していました。琉球は周囲を海に囲まれた国ではありますが、海によって世界各地とつながり、人を介して様々なものが琉球に持ち込まれ、また琉球から他の地域・国へともたらされました。

海の向こうからやってくる来訪者は、時代に応じて目的や手段も変化していきます。琉球をその影響下に置く意図を持った薩摩や、国王を琉球國中山王として冊封するために明や清の皇帝より派遣される冊封使、思わぬ海難事故のために意図せず琉球の地に流れ着いた人々、交易や通交等の明確な意図をもつ欧米諸国の使者等、様々な地域や国の人々が琉球を訪れています。人の往来は、文物の移動に加えて文化の伝播も誘発します。琉球にもたらされるだけでなく、冊封使や薩摩、ペリー艦隊の人々によって、琉球の地理、風俗等の情報も琉球の外へと発信されて、記録として残されました。

このテーマでは、琉球と海によってつながっている広い世界を恩納の地に関連するエピソードや文
物等から考えてみたいと思います。
（富田千夏）

恩納村への漂流・漂着記録



恩納村博物館の外にある「唐人墓」は19世紀に恩納村の仲泊に漂着した中国（清）の人々を埋葬したお墓です。『歴代宝案』には彼らの漂流・漂着に関する記録が残っています。これによれば、1824年12月6日、恩納間切仲泊の海岸に中国人6名が水櫃（飲料水をためる為の桶）に入った状態で流れ着きました。住民たちの助けによって上陸した彼らのうち5名はすでに死し、残った1名が呂正です。呂正の供述によれば、彼らは福建泉州府同安県の商人で、本来32名が乗船していました。彼らは1824年5月22日に同安県を出発し、26日に台湾にて大米を船に積み込んだ後27日に出発、8月25日に天津府にて交易します。10月3日に烏棗（干したナツメ）を積み込んで天津を出発、10月28日に山東において豆餅を購入しました。11月4日、山東を出発して福建に戻ろうとしたところ12日に風と波にあおられて船が沈没し、26名がなくなってしまいます。呂

正達6名はわずかな食糧と共に水櫃に乗り込み、波のまま漂流し、12月6日に恩納間切の仲泊に漂着しました。呂正以外の5名は恩納の地に埋葬され、呂正は泊村（現在の那覇市泊）に送られて収容され、翌1825年に派遣された護送船によって福建に送り届けられました。

（富田千夏）



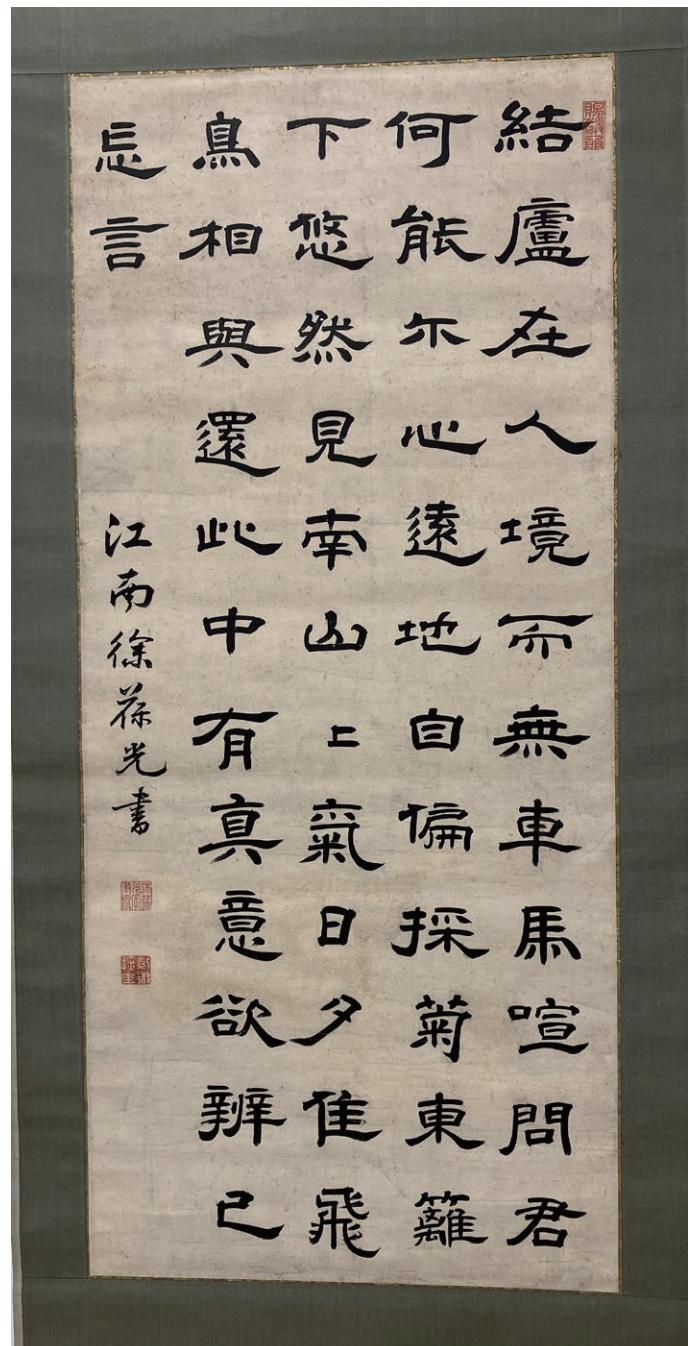
ちゅうざんでんしんろく
『中山伝信録』 (伊波普猷文庫)

じよほこうしょ
徐葆光書



じよほこう そしゆう ちようしう
徐葆光は中国江南の蘇州府長州県の人で、1719年に
尚敬王の冊封副使として来琉しました。『中山伝信録』は、
1719年の冊封の顛末をまとめたものです。冊封儀礼の
様子や、滞在中に見聞した琉球の風俗、言語、地理、歴史などを記録し、挿絵が多く附されています。江戸時代
の知識人の琉球に関する情報は本書を根拠としているこ
とが多く、『中山物産考』等、影響を与えた資料があり
ます。またアントワーヌ・ゴービル宣教師によってフ
ランス語に抄訳され、ヨーロッパでも紹介されています。

徐葆光は琉球に滞在している間、程順則をはじめとした多くの琉球人と詩を贈答するなど交流し、書跡も残しました。彼の書跡で代表的なものの一つには首里城の「龍樋」をたたえた石碑「中山第一」が挙げられます。展示の書は六朝時代の詩人陶淵明の漢詩『飲酒 其の五』を徐葆光が隸書で書いたものです。
(富田千夏)



『琉球諸島図巻』

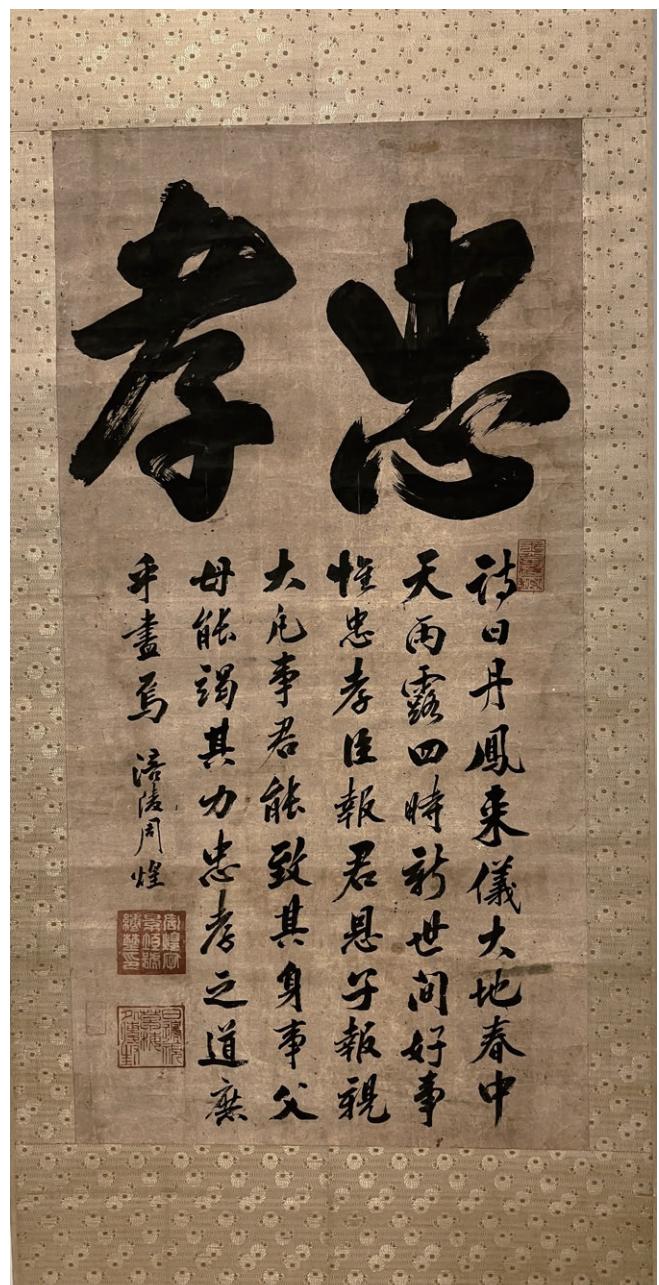
薩摩の川尻および山川の港からトカラ列島、さらには奄美群島および沖縄から先島に至る島々を結ぶ航路図と考えられています。航海に必要な地名や島名、岩礁や瀬、距離、方角等の情報が記述されており、他に類する資料がなく稀少なものです。資料に記述された方角はその多くが午や未といった南方を指し示していることから、この図は基点を北にしたものと言えます。さらには、いくつかの島は石高(各地の経済規模や国力を表す基準)が朱書きされており、沖縄島は6万2千199石、宮古と八重山はあわせて9万883石9斗1合1才と記述され、1644年に成立した正保国絵図に記された数値と同じとなっています。しかし、この図には成立時期や製作者につながる情報の記載がなく、詳細は不明です。

(富田千夏)

『官板 琉球国志略』(仲原善忠文庫)



周煌忠孝二大字



周煌は中国四川の出身で、1755年に琉球国王世子尚穆の冊封副使として、正使全魁や従客の王文治と共に来琉しました。『琉球国志略』は、この時の冊封に関する記録をまとめたものです。16巻17部門からなり、琉球の地理、歴史、文化、民俗、冊封使としての仕事など多岐にわたる内容を部門別に系統立てて記載しています。全魁・周煌による冊封の旅は、船が久米島に漂着したり、随行の兵役が撫恤金にまつわるトラブルを起こしたりと多難でした。本書は1831年に日本で刊行された和刻本で、6冊本になっています。

周煌も詩や書に優れ、琉球滞在中に書跡を残しています。琉球大学附属図書館所蔵の『冊封使周煌掛板』はかつて那覇市首里にあった天王寺の旧蔵品です。展示の書は周煌による「忠孝」の大きな二文字が上段に書かれたものです。下段には「忠孝」の字義について、七言絶句の漢詩（典拠不明）と「論語」の引用によって記述されています。「忠」は良く君に事をえることを言い、「孝」は良く父母に事をえることを言います。

(富田千夏)

ペリー提督遠征記

『ペリー提督遠征記』は、ペリー率いるアメリカ艦隊の航海日記（全3巻）で、1856年の第1巻より順次出版されました。第1巻が〈本記〉、第2・3巻は付録で、第2巻は自然科学と各種の報告、第3巻は観測路図となっています。

第1巻25章のうち7章が琉球の記述にあてられており、第7～11章では、最初に琉球へ訪問した際の島内探検調査、首里城訪問、琉球社会の観察などが記録されています。1853年5月30日～6月4日まで島内探検調査に出かけたペリー一行は、6月2日～3日に恩納村を通っています（名嘉真～山田）。「恩納岳の麓」と題する挿絵は名嘉真集落の谷間と穀物倉庫を描いたものになります。遠征記には「われわれはこのニイコマ（名嘉真）という村を二時半頃に出発した。ここは今回の行程の最北の地点であり、メルヴィル港（運天港）からは八、九マイルしか離れていないはずだった」と記されています（F.L. ホークス編纂；宮崎壽子監訳『ペリー提督日本遠征記 上』角川文庫、2014年）。また、「琉球ウンナ近くの公館」と題する挿絵は恩納間切番所の様子を描いたもので、これを描いた画家のハイネにとって恩納の村はお気に入り場所だったそうです。

（前田勇樹）



＜恩納岳の麓＞



Kung-Kwa near On-na, Lew Chew.

『ペリーが記した恩納間切番所の記録』

「私はテリーに命じて星条旗を掲げさせると、日が沈んでしまわぬうちに、急いで美しい谷のスケッチに取りかかった。その間にハイネ氏は公館（恩納間切番所）の外観のスケッチに精を出した。私が崖のそばに腰かけていると、膝まで届きそうな真っ白な顎鬚あごひげをはやした風格のある老人が近づいてきたが、私をじっと見ると、低く腰をかがめて礼をしただけで去っていった。この村の名はウンナ（恩納）といった。このあたりではまだ鶏が手に入らなかつたが、村人たちが二匹の小さな鮮魚にカボチャ一個とキュウリを何本か添えて持ってきてくれた。砂糖も豚肉も底をつけ、手持ちの食料品といえば、茶、コーヒー、それに堅パン少々が残っているだけだった。琉球人たちは公館の敷地内で火を焚き、そのうちの六人は終夜火のまわりに腰をおろしていた。」

(F.L. ホークス編纂；宮崎壽子監訳『ペリー提督日本遠征記 上』角川文庫、2014年、422頁)

恩納村の暮らしと自然

恩納村の暮らしと自然をテーマとし、恩納岳や芸能を中心いて展示しています。恩納村は、農業を生業としつつも、豊かな恵みをもたらす海との暮らしが密接でした。海岸の豊かなサンゴは、多くの生き物の生を支える大事な存在です。そのサンゴの標本を展示することで人に恵みをもたらすサンゴの重要性に思いをめぐらせていただけたらと思います。珊瑚に関連した書として『中山物産考』を紹介し、人々が250年以上前から琉球の珊瑚に关心を寄せていたことを示します。また、ジュゴンも発見事例がある、豊かな海です。

琉球の名所として歌や絵にも描かれる恩納岳についても、多方面からの紹介を心がけました。例えば、恩納なべが琉歌に詠んだ恩納岳、相川俊孝が描いた「恩納岳の遠望」などです。文学として、「琉歌集」では、恩納村の伝説の人物恩納なべの琉歌を紹介しました。今も色あせない恩納なべの歌の魅力を再発見できることでしょう。また、かつては喜びも悲しみも琉歌に乗せて歌っていた琉球人の表現方法に思いをはせていただけたらと思います。1531年に1巻が編纂された琉球の祭司に関する文献『おもろさうし』からは、恩納村の按司が出てくるおもろを紹介します。芸能からは、「組踊集」の台本から、恩納村の各集落で上演される組踊「忠臣身替の巻」を紹介します。また、ブル文庫から恩納の紅型幕が使われている「芝居の舞台」を取り上げ、恩納村のかつての芸能の様子を感じ取っていただけたらと思います。

琉球・沖縄の方言は、地域ごとに特色があります。その特色を示すために、恩納方言の動物語彙(方言マップ)と動物標本を掲示しました。多様性のある言葉の世界をご覧ください。また、風樹館が所蔵している恩納岳の生物標本や、藍壺に関する資料を示し、陸地の豊かな自然と人との関わりを紹介しています。
(崎原綾乃)

ちゅうざんぶつさんこう 『中山物産考』



本書は、田村登(1718~1776)が1769年に著したもので、1933年、岩瀬文庫の所蔵本から笠岡晴風が写した写本です。著者の田村は、田村藍水の号で知られ、医者・本草学者として有名な人物でした。本書は全3巻で構成され、江戸時代の学者に様々な示唆を与えた徐葆光の『中山伝信録』の影響がみられます。上巻は、琉球の海産物だけでなく地誌についても述べるなど、『中山伝信録』の強い影響を思われます。本企画展では、恩納村の「サンゴの村宣言」にちなみ、『中山物産考』上巻の美しいリュウキュウサンゴの図を紹介します。また、中巻では琉球の植物や鳥類・海産物などの物産や、下巻は植物や魚介類・爬虫類などの絵が、それぞれ彩色した図で説明されています。
(久貝典子)

「琉球風景 珊瑚礁」 (さかもとしようでん 「坂元商店絵葉書アルバム2」)



坂元商店は、鹿児島出身の坂元栄之丞が1905年に那覇市天妃町の大門前通りと久米大通りの角に開業した商店です。沖縄の風景や民俗を写した絵はがきを月替わりで次々と発売したことでも有名で、絵はがきは観光客に人気がありました。この絵はがきは、琉球の珊瑚礁が写っています。撮影場所は不明。珊瑚礁がむきだしになった干潟で、3人が珊瑚礁を見ています。沖縄では、珊瑚礁に囲まれた浅い穏やかな海をイノーと呼んでいます。イノーは、海の上にもかかわらず、村人によって細かくうろこ状にエリア分けされて場所ごとに名前がついていて、人の暮らしに密接した場所でした。そのイノーの豊かな生態系が、人の暮らしや海の生態系のサイクルを支えていました。
(崎原綾乃)

サンゴとジュゴンの標本（風樹館所蔵）



Acropora digitifera (Dana, 1846)
コユビミドリイシ RUMF-ZG-00008



Dipsastraea speciosa (Dana, 1846)
キクメイシ RUMF-ZG-00303



Galaxea fascicularis (Linnaeus, 1767)
アザミサンゴ RUMF-ZG-00176

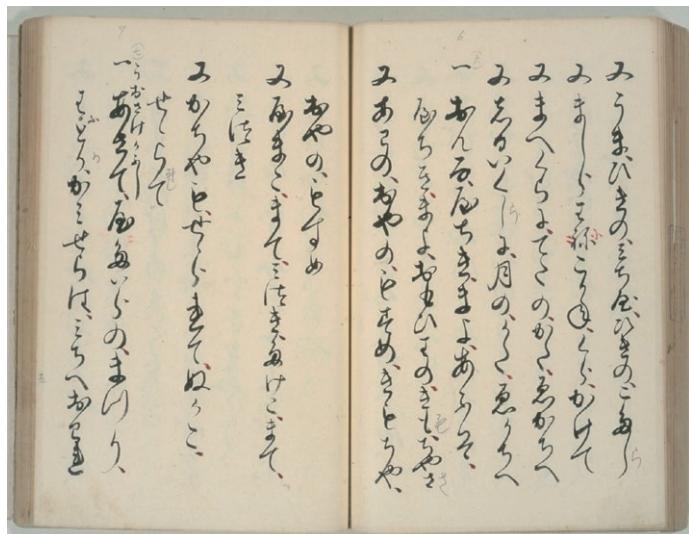


Fungia fungites (Linnaeus, 1758)
シタザラクサビライシ RUMF-00188

ジュゴンの頭骨標本と恩納村での発見事例



『おもろさうし』十三、十四（仲吉本）（伊波普猷文庫）



し」が収められています。その巻十四の6番目のおもろとして、恩納村をうたったおもろがあります。

（崎原綾乃）

『琉歌集』（伊波普猷文庫）



おんがほん おろくうどうんほんくみおどりしゅう うつし 『恩河本 小禄御殿本組踊集』[写]



「おもろさうし」とは、奄美・沖縄諸島に伝えられた儀礼歌謡「オモロ」を集めた歌謡集です。首里王府が編纂し、1531年から1623年の間に成立。全22巻、1554首のオモロを収めています。1710年に再編された際に2部作成され、王家である尚家と、おもろ主取家である安仁屋家に伝えられています。写本の系統としては、尚家本と安仁屋本系統とに別れています。この仲吉本は、仲吉朝助が所有していた安仁屋本系統の写本です。この第五冊には、巻十三「船ゑとのおもろ御さうし」、巻十四「いろいろのゑさおもろ御さうし」が収められています。

（崎原綾乃）

琉歌集は、琉歌の歌詞を書き記したもので、本書は、歌うときのメロディである節ごとに分けて編集されており、「節組琉歌集」と呼ばれるタイプのものです。「かぎやで風節」をはじめとする100以上の琉歌が集められている貴重な琉歌集です。編纂者の田港朝春という人物については不明です。7ページ、13ページ、17ページに恩納村の伝説の人物である恩納なべの琉歌が書かれています。

（崎原綾乃）

恩納村は、年中行事として農閑期に豊年祭を行って神様へ一年の豊年の感謝などを祈ってきました。恩納村の豊年祭のはじまりは、廃藩置県後からだという伝承があります。各集落ごとに演目や踊りに特色があります。1719年に琉球で作られた古典演劇「組踊」も豊年祭の演目のひとつとして伝承されています。今回は、恩納村内の多くの集落で伝承されている「八重瀬」別名：「忠臣身替の巻」の台本を展示します。

（崎原綾乃）

芝居の舞台 (Bull 文庫ガラス乾板)



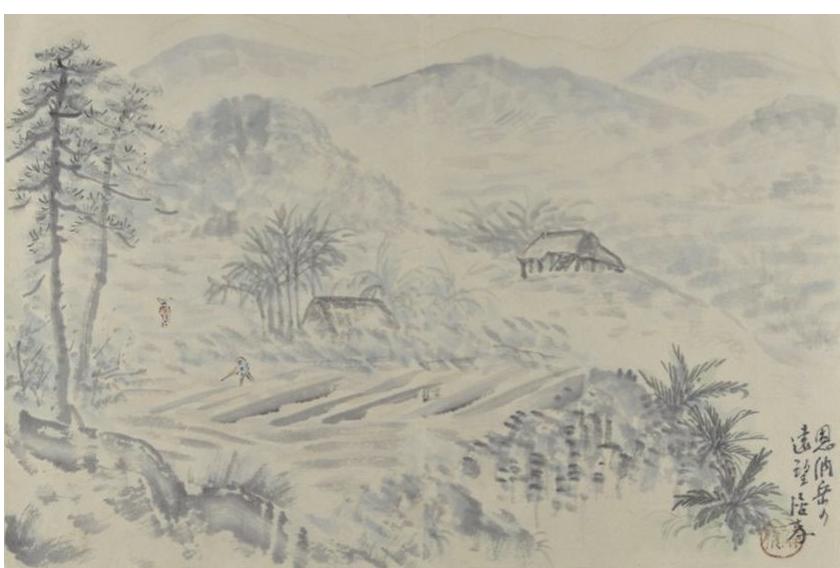
ブル (the Rev. Earl Rankin Bull, 1876 ~ 1974) は、1911 年に米国のメソジスト監督教会から九州・沖縄地区へ派遣された宣教師です。15 年間日本で伝道をしました。1911 年に来沖。沖縄でキリスト教の布教や、中学校で英語を教えました。また幕末に来琉した英宣教医ベッテルハイムの記念碑を 1926 年に那覇に建立するなど、大正時代の沖縄で顕著な活動をしました。沖縄研究の泰斗となる伊波普猷 (まじきなあんこう) や真境名安興 (ひがおんなかんじゅんしまぶくろげんいちろう)、東恩納寛惇 (とうおんのうかん dùn)、島袋源一郎 (しまぶくろげんいちろう)、神田精輝 (かんだせいき) らと親密な交わりをもちました。

戦後、琉球大学附属図書館に「ブル文庫」を寄贈した人としても知られています。

ブルのガラス乾板は、モノクロ撮影のあと、人の手で色を塗ったものです。そのため色については正確ではありません。この写真は、芝居の舞台を撮影したものです。舞台中央に男性が立ち、右手をあげている途中です。舞台上の手前には、男性が座ってそれを見ています。奥の紅型幕の前には、着飾った女性が 3 名座っています。なお、この演目は不明です。舞台の後ろには、紅型幕がかけられており、「恩納」という文字が白く染め抜かれています。恩納の紅型幕であることがわかります。ブルは、この写真に英語でキャプションをつけています。日本語訳は以下の通りです。「夏の収穫が終わった後、砂糖作りが始まる前の満月の日は、田舎の村々にとって一種の芝居を催す絶好の時です。これは純粋に共同体の行事です。衣装や小道具は村あるいは青年会の所有物で、演じるのも村人たちです。」

(崎原綾乃)

「恩納岳の遠望」 (相川俊孝 『琉球游記』)



石川県出身で、大正～昭和時代前期の詩人である相川俊孝は、1889 年に生まれ、1940 年に亡くなりました。父は彫刻家、弟は画家の家庭に育ち、室生犀星の影響を受けて詩作をはじめようになった相川は、第四高等学校を中退後、佐藤春夫の序文を得て、新詩壇社より前衛的な現代詩『万物昇天』 (ぼんぶつしょうてん) を刊行しました (1924)。後に「放浪の詩人」と呼ばれ、各地を訪れています。

『琉球游記』は、相川が沖縄の各

地を巡った時に描いた画帖です。「恩納岳の遠望」という作品は、雄大な恩納岳のふもとの農村風景を描いています。汗して働く農民ののどかな様子が、白と黒のモノトーンで描かれています。

(久貝典子)

動物の言語マップからみえる地域の人々と動物

動物の言語マップでは、「カマキリ」「トカゲ」のような身近な動物について、恩納村の各地でどのようにいうのかを地図でわかりやすくあらわしました。特に子どもたちが遊びに使う昆虫類やトカゲは、地域のバリエーションが豊富で、語形も変わりやすいです。

カマキリは空手の使い手？

カマキリの方言語形には次のような系統があります。

- ①イサトゥー系
- ②マミサトゥ系
- ③コーサンクー系
- ④いたた一まーりー系
- ⑤ひさまんかー系

①イサトゥー系の語形イサトゥーは、首里那覇など他の中南部でも広くみられる語形です。

②マミサトゥ系の語形もマーミサトゥ（瀬良垣）、マミサートゥ（恩納・富着）、マーミサトゥ（南恩納）に分布しています。

③コーサンクー系の語形は恩納村の北部に分布し、クーサンクー（安富祖）やコーサンクー（名嘉真）がみられました。コーサンクー系は、空手の型の名称に由来します。カマキリは前脚をもちあげる動作をするので、空手のかまえを連想させるかもしれません。

このように、言語マップは、地域の人が生き物たちをどのようにとらえていたのか、地域ごとの違いや地域をこえた共通点を知るてがかりになります。あなたの地域であなた自身や、あなたの両親、祖父母世代がその動物をどのようによんでいたのか、どのように関わっていたのかを思い出したり、調べたりしてみませんか？

（當山奈那）



<風樹館提供>

①イサトゥー系

イサトゥー

イサトゥーメー、サートゥーメー

イハトゥーメー

②マミサトゥ系

マーミサトゥ、マミサートゥー、

マーミサトゥー

ナミサートゥ

③コーサンクー系

コーサンクー、クーサンクー

④いたたーまーりー系

いたたーまーりー

⑤ひさまんかー系

ひさまんかー



琉球大学資料展 恩納村の海と暮らし

令和5年度琉球大学附属図書館・琉球大学博物館（風樹館）企画展

主催 琉球大学附属図書館、琉球大学博物館（風樹館）

共催 恩納村教育委員会、恩納村博物館

期間 令和5年10月7日（土）～10月29日（日）

場所 恩納村博物館

企画 琉球大学附属図書館沖縄関係資料専門委員会

東矢光代（附属図書館長・国際地域創造学部教授）

前城淳子（人文社会学部准教授） 金城ひろみ（人文社会学部准教授）

當山奈那（人文社会学部准教授） 麻生伸一（人文社会学部教授）

仲間伸恵（教育学部准教授） 北上田源（教育学部准教授）

赤嶺守（名誉教授）

スタッフ 琉球大学附属図書館

富田千夏 前田勇樹 久貝典子

崎原綾乃 林あんり 佐々木稀乃香 黒島颯

琉球大学博物館（風樹館）

佐々木健志 島袋美由紀

展示協力 琉球大学考古学研究室

後藤雅彦（国際地域創造学部教授）

主税英徳（国際地域創造学部講師）

印刷 精印堂印刷

発行日 令和5年10月7日

問合せ 琉球大学附属図書館情報サービス課

Mail : tsokinawa@acs.u-ryukyu.ac.jp

琉球大学附属図書館のホームページ・各SNSはこれら▶



フェスタ
国立大学2023